

# いま、 会いたい

「いま、会いたい」は旬の政治家に迫る新コーナー。初回は、鮮やかな青いドレス姿で第3次小泉改造内閣の一員となった猪口邦子少子化・男女共同参画担当相に登場いただいた。日本

は、間もなく人口減少時代に突入。実際に子育てと研究者の仕事とを両立させてきた新人閣僚の手腕に期待が集まる。

(聞き手・白鳥龍也)

## 猪口邦子 少子化・男女共同参画担当相

国の軸として、何が大事か。一つ目は安全保障。二つ目は、日本は無資源国ですから経済の軸がとて大事。一九九〇年代からの不況のトンネルを抜け出すため、小泉政権は構造改革を徹底し、経済を立て直しをやってきた。目的は国の余力を絞り出し競争力を強化することです。競争に勝って何をやるのか、との答えがこの大臣職にあると思っています。三番目の国の軸「社会軸」の担い手として社会政策を強化していく。この段階で専任閣僚が設置されたのはこの必然であるかと思いません。

△少子化専任閣僚の誕生は、日本の政治史上初。その意義を最初から熱く語った。でも、経済を立て直しの間に、出生率は下降の一途。これからどうすれば▽

一つは育児と仕事の両立支援。直接的には育児休業取得の促進や保育機能の提供。育児休業後に職場に戻っても、身分の変更なく短時間勤務を認める仕組みも大切でしょう。子育て世代には、男性も含め働き方を見直していただく。いわば「暮らしの構造改革」や、経営側の意識改革も伴う「認識の構造改革」が必要です。

興味深いことに、各国の女性の労働力率と出生率を調べてみると、北欧諸国や米国、ニュージーランドなど働いている女性

### 育児と仕事の両立支援

が多い国の方が出生率が高い。三十年前はどの国も逆。女性は普通に家庭に入って子どもを産んでいた。先進国は両立支援を充実させ、出生率も回復させたわけです。日本はどれほど、その分野の政策が不足だったかを反省しないと。

△経済的な理由から、子育てを敬遠する傾向も強いのでは▽

冷戦後のグローバル化と不況を同時に経験して、日本は若い世代の雇用はフリーター、ニートなどと非常に多角化し、相対的に窮乏している可能性がある。

性があります。雇用政策は少子化と一見関係ないようですが、そつた点から若い世代が不当な苦勞を強いられないようにしたい。来年の六月には、少子化社会対策推進会議が報告をまとめ、政府の骨太の方針に反映させて各省に予算要求してもらいます。そこで両立支援や雇用対策を重点化していきたい。

△担当相自身、両立支援などない時代に子育てをしてこられた。その経験から言えることは▽

私や私より上の世代は、結局、個人的な解決を求めてきま

した。私だって私の母親、「おばあちゃん育児」に相当頼り、あと、近隣の子育て経験のあるお母さんたちに助けてもらいましたよ。今後はそういうのを政策でできればいいわけです。具体的には、自治体レベルで子育て支援のためのコミュニティを育ててもらう。全国のプロック単位で知事さんを集まってもいい、私が出向いて協議をしていくプロセスを始めます。

△ただ、そういう環境を整えれば、若い世代が自然に「子どもを産みたい」と思うのでは

うか▽

# 多様な選択許す社会に



池田千恵子撮影

いのぐち・くにこ 千葉県出身。米国エール大学大学院博士課程修了、政治学博士。上智大教授、行政改革会議委員、男女共同参画会議議員、ジュネーブ軍縮会議日本政府代表部特命全権大使など歴任。今夏の郵政解散後、自民党が擁立を進めた女性候補の一人として衆院比例代表東京ブロックで初当選し、10月の内閣改造で初入閣。著書に「戦争と平和」「政治学のすすめ」「戦略的平和思考」など。53歳。

やはり、専任閣僚は必要だったですね。日々、現場で陣頭指揮をとっているから、政策にスピード感が出てくるんじゃないかと。専任閣僚は必要だったですね。日々、現場で陣頭指揮をとっているから、政策にスピード感が出てくるんじゃないかと。

△研究者や審議会委員として政策提言する立場から、実際の指揮官になつての感想を▽  
私は、ずっと男女共同参画会議の議員を務めてきましたし、教育者として若い世代と毎日向き合い、希望や不安をしっかりと受け止めている。そういう点は今の仕事に生きていると感じています。  
軍縮大使時代は、その政策の遅れによって日々千人以上が死んでいるのだから、一分もムタにできないと思った。少子化対策や男女共同参画推進の仕事は、シビアさが違うかもしれないけど、一見たいじょうぶさに見えて、深い深い苦しみを抱えている人たちがいる。それに、第二次ベビーブーマーの出生力に期待できるのは、あと五年かちょっと。今の仕事もスピード感が大事だと事務方に伝える、ものすごい協力を得られているので、やりがいがあります。